

韓日語の連体節に現れる「??(TANUN)」と「という」に関する実証的対照研究

著者	金 普仁
号	11
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第141 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59233

K I M B O I N
金 普 仁

学 位 の 種 類 博 士（国際文化）
学 位 記 番 号 国博 第 1 4 1 号
学位授与年月日 平成 2 4 年 9 月 2 5 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程）
 国際文化交流論専攻
学 位 論 文 題 目 韓日語の連体節に現れる「다는(TANUN)」と「という」に関する実証的対照
 研究
論 文 審 査 委 員 （主査）
 教 授 上 原 聡 教 授 佐 藤 勢紀子
 准教授 江 藤 裕 之
 准教授 中 本 武 志
 教 授 井 上 優（麗澤大学）

論 文 内 容 の 要 旨

第 1 章 序 論

本研究は韓国語と日本語の連体節に見られる言語形式「という」及び「TANUN」について、コーパス言語学に基づいた実証的研究を行い、その類似点と相違点を探ることを目的とし、形態論的研究の成果を踏まえ理論的に分析する。

本章では、研究の動機および目的を述べた後、研究方法として調査資料と分析方法を示した。

本研究のデータは、韓国語と日本語の原文及び翻訳文(対訳小説)の資料をそれぞれ 3 冊を用いた。小説を選んだ基準は、内容の構成が似ていることを考慮し、ミステリアスな事件を解決していく推理小説と、愛する人に対する想いを女性主人公の立場から描き、また、心の傷を再生していく恋愛小説を選んだ。また、必要に応じて、第 4 章で先行研究の再検討のため、韓国の「東亜日報」から 2010 年 01 月 01 日~2010 年 06 月 30 日にインターネット上に掲載された 143 編の社説の例文を用いた。なお、本研究で取り出した韓国語における例文の表記は、Yale Romanization System に従った。

後接名詞の分類においては、寺村(1992)の「外の関係」の主名詞になる名詞分類を参考にし、3種類の名詞(コトを表わす名詞、発話名詞、思考名詞)において使用・不使用の実態を把握した。

本研究の意義は、例文の抽出方法における新たな発見と日本語教育・韓国語教育への応用が挙げられる。「TANUN」と「という」には不使用になる場合が出てくるが、実例を抽出する際に「TANUN」の検索から「という」の不使用の例文が抽出可能であり、「という」の検索からは「TANUN」の不使用の例文が取り出せられるという全ての例文を観察できる利点がある。本研究で「という」と「TANUN」の使用・不使用の対照的な相違を探り、明らかにすることによって、日本語教育において韓国人日本語学習者に対する日本語教育への応用と韓国語教育において日本人韓国語学習者に対する韓国語教育への応用ができると考える。まず、「という」も「TANUN」も使用条件により使用・不使用の使い分けがあり日本語母語話者でも韓国語母語話者でも明確に区別できないものもあるが、本研究の結果によってどのような場合に「という」と「TANUN」を使用し、どのような場合に不使用になるかを日本語学習者と韓国語学習者に指導することが考えられる。さらに、両形式の使用実態が異なることを確認した上で、韓国人日本語学習者と日本人韓国語学習者が母語の干渉によって、過剰使用あるいは欠落使用になることにも指導が可能になると考える。

第2章 先行研究

本章では、「という」と「TANUN」が用いられる構文に関する先行研究を検討し、問題点を指摘した。まず、「という」が名詞に結びつく場合の「という」構文の機能、「という」が結びつき引用を表す構文中の「という」の省略現象に関する研究の問題点を指摘した後、次に「TANUN」の研究に関する研究を概観し、本研究の方向性について述べた。

2.1 日本語「という」に関する先行研究

「という」を用いた連体節は、「X という Y」の形式で「という」により様々な要素を文中に導き、X が名詞 Y を修飾する表現である。この際、「X」は語になったり、文になったりする。

「X という Y」の「X」が語になる場合は、「名を引用して、その名と対象とを同定する」(丹羽 1989:27)ことを表すが、具体的には次の3つの機能が知られている。「未知の X を導入する」、「X を捉え直す」、「X と Y の上下の関係、あるいは広く具体と抽象の関係を示す」という機能である。また、田窪(1989)、戸村(1992)は、[1] X が話者の「なわばり」に属さない場合、[2] 聞き手の「なわばり」に属さない X を初めて談話に入れる時、という2つの状況で「という」を使用することを指摘した。

「X という Y」の「X」が文になる場合においては、「という」が現れたり現れなかったりする現象の解明のため、様々な試みがあった。寺村(1992)は、主名詞が修飾節の用言に対して補語と考えることのできるような内の関係では「という」を使用しないが、主名詞は修飾節の外から来たものと言える外の関係では「という」を使用するとしている。さらに、外の関係では後接名詞自体の性質とし

て「という」を必須とするもの、任意とするもの、使用不可のものがあると述べている。また、「という」の使用は修飾節の陳述度の高低と密接に関係していると述べ、修飾節の述部が「～だ」で終わったり、命令形で終わる場合、それを後接名詞につなげるため、必ず「という」が要求されることを指摘した。

岩淵(2000)は、内容節が後接名詞を連体修飾する場合、「という」を入れることができるが、「という」は必須と任意という2つの場合があると説明している。大島(1991)では、「という」が必須となる条件として、言語作品(記事、コピー)、発話(言葉、報告)、言語表現と関係のある名詞(意見、教訓)が後接することを挙げている。

以上、寺村(1992)、岩淵(2000)、大島(1991)などでは発話性の名詞が後接すると「という」は必須要素になることが指摘されているが、次の Josephs(1976)と戸村(1991)の研究ではその反対の見方を示している。

Josephs(1976)では、「という」があるかないかは、意味的性質により異なると指摘している。(1)では補文の内容が真であるという話し手の前提があるのに対し、(2)では真であるかどうかについて話し手が疑いの気持ちを持っており、それが「という」によって示されていると説明している。

(1) 昨日の新聞で「田中さんが離婚した」ことが報告された。

(2) 昨日の新聞で「田中さんが離婚した」ということが報告された。

(Josephs 1976:356)

戸村(1991)では、(3)の「話」を後接名詞とする名詞句は、修飾節が同じであるにもかかわらず「という」の介在に関わる容認性の判断は全く逆であることを指摘している。

(3) 佐藤さんがアメリカへ行った $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. } \emptyset \\ \text{b. } \text{という} \end{array} \right\}$ 話を聞いた。

(戸村 1991:220)

(3a)は「佐藤さんがアメリカへ行った」時の出来事や経験についての話を聞いた、という内容を表している。これは「佐藤さんがアメリカに行ったかどうか」が焦点になっているのではなく、「佐藤さんがアメリカに行った」ということに加えて、それに関連した一連の「ストーリー」を聞いたことを意味する。(3b)では、「ストーリー」は眼中にはなく、ただ「佐藤さんがアメリカに行ったかどうか」という命題だけが取り上げられている。

以上の概観を通じて、連体修飾節がどのような形で終わるか、後接名詞はどのような性質を持っているかといったことは、「という」の介在可否の重要な要因であることが分かった。しかし、研究者の中でも見解の違いが見られることを勘案すると、この修飾節の述部の形式と後接名詞の性質だけでは、「という」の介在可否を明らかにする十分な決め手にはならないと考える。

2.2 韓国語「TANUN」に関する先行研究

文に結びつき、後接名詞を修飾する「TANUN」の体系には後接名詞が省略された形態と後接名詞が結合した形態の2種類がある。後接名詞が省略された(4)のような場合において、Park(2010)は「(i)自分の声と他人の声、両方を表す「ハイブリットな構造」を持つ、(ii)後続する名詞を明記しない代わりに、絵文字などを使うことによって、話し手の様々な感情を効果的に伝えることができる、(iii)主に書き手の「否定的」な自己評価を間接的に引用する際に用いられる」と述べている。また、金廷珉(2010)は文末に用いられる「TANUN」形式を「連体形止め」と称し、「(i)書き手・話し手の経験(出来事)を引用する、(ii)書き手・話し手の考え、感情を引用する、(iii)書き手・話し手の意志(決意)を引用する」という機能があると述べている。

(4) 書き手・話し手の経験(出来事)を引用する

양이 꽤 많더라구요. 둘이 먹다가 남겼^다는...
 Yang-i kkway manh telakwuyo. twul-i mektaka namkyess-TANUN...
 量-が かなり 多いかったですよ. 二人 食べて 残した-みたいな...
 「量がかなり多かったですよ。二人で食べても残したみたいな…」

しかし、これらの研究対象の「TANUN」は後接名詞が消えた「TANUN」構文であり、連体従属節としての機能を失い、文法化の観点から捉えているものであるため、本研究の性質とは関連が少ないと考え、対象外とする。

なお、우형식 Wu, Hyengsik(1987)、안명철 An, Myengchel(1990)、김선효 Kim, Senhyo(2004)、이관규 I, Kwankywu(2007)などで研究した「TANUN」に後接名詞が結合している形態について検討する。

従属節の事柄が「事実を前提するか否かの可否」「TANUN」の使用・不使用の区別が可能であると述べている(우형식 Wu, Hyengsik 1987、서정수 Se, Cengswu 2006)。すなわち、事実を前提していることは「事実性が強い文」を意味し、事実を前提していないことは「事実性が弱い文」を示す。例えば、(5a)は事実性が確実に感じ取れる文で「TANUN」が不使用になるが、(5b)は事実性が弱い文であり「TANUN」を使用する文になると指摘している。

(5) a. 범인이 검문소를 통과한 사실
 Pemin-i kemmwunso-lul thongkwahan sasil
 犯人-が 検問所-を 通過した 事実
 「犯人が検問所を通過した事実」

b. 범인이 검문소를 통과했^다는 사실
 Pemin-i kemmwunso-lul thongkwahayss-TANUN sasil
 犯人-が 検問所-を 通過した-という 事実
 「犯人が検問所を通過したという事実」

(우형식 Wu, Hyengsik 1987:184)

特に、形式名詞「것 kes(こと)」が用いられた場合、(6a)のように「TANUN」を使用しない文では酒を止めた事実が明確であるが、(6b)のように「TANUN」が介入すると、タバコを止めたことの確実性が(6a)より薄い文になると述べている。つまり、「TANUN」が用いられる文では非事実の文が多いとしている。確実性が(6a)より弱くなる理由としては、「TANUN」には従属節を引用する性質があるため、直接に確認した事実より信憑性が落ちることを指摘している(서정수 Se,Cengswu 2006 : 1319)。

- (6) a. 그가 술을 끊_은 것이 확실하다.
 Ku-ka swul-ul kkunh-UN kes-i hwaksil-hata.
 彼-が 酒-を 止めた こと-は 確実-だ.
 「彼が酒を止めたことは確実だ。」

- b. 그가 담배를 끊_{었다는} 것이 확실하다.
 Ku-ka tampay-lul kkunh-ess-TANUN kes-i hwaksil-hata.
 彼-が タバコ-を 止めた-という こと-は 確実-だ.
 「彼がタバコを止めたということは確実だ。」

(서정수 Se,Cengswu 2006 : 1318)

また、서정수 Se,Cengswu(1994, 2006)は「보도(報道)」や「소식(消息・お知らせ)」、「기사(記事)」といった名詞が後接する文には、従属節の事実性の可否がまだ判明しておらず明らかでないため、「TANUN」を使用することは自然になると述べている。

- (7) a.* 그들이 혼인하_는 {보도・소식・기사}가 신문에 났다.
 Ku-tul-i honin-ha-NUN {poto・sosik・kisa}ga sinmwun-ey nassta.
 彼ら-が 婚姻する {報道・消息・記事}が 新聞-に 出た.
 「彼らが婚姻する{報道・消息・記事}が新聞に出た。」

- b. 그들이 혼인하_{다는} {보도・소식・기사}가 신문에 났다.
 Ku-tul-i honin-han-TANUN {poto・sosik・kisa}-ga sinmwun-ey nassta.
 彼ら-が 婚姻する-という {報道・消息・記事}が 新聞-に 出た.
 「彼らが婚姻するという{報道・消息・記事}が新聞に出た。」

(서정수 Se,Cengswu 2006:1317)

「TANUN」の使用と不使用の現象が生じることを指摘しつつ、従属節の事実性と関連づけてその原因の解明を試みたが、明確に「TANUN」の使用・不使用の現象にはまだ不十分な点がたくさん見られる。先行研究の指摘に基き、より詳細な分析と考察が必要だと思われる。

第3章 外の関係における「という」の使用・不使用の実態

「という」の使用・不使用の実態を解明することを目的に、日韓対訳小説を用いてこれまでに提案されてきた諸分析をの要因を応用して分析を試みた¹。本章では、次の点が明らかになった。

- (1) まず、陳述と関係ある要素が従属節に現れる「外形的な要素」に関して考察を行った。この場合、寺村(1992)は義務的に「という」を使用すると指摘した。本節では、その中で推量を表わすモダリティ形式を調べると、主節の主体にとって従属節の出来事が確認することのできないことであれば、「という」の使用が見られ、予想可能な情報であると連体節を取らないものになることが見られた。また、ある事柄に対して確実に確言できる断定表現の「ダ」が従属節の述部に位置する場合は、従属節の形態を見ると名詞と形容動詞という2つの形態が前接していることが分かった。名詞においては、外形的な性質により陳述度が高くなり、「という」を使用するが、形容動詞においては、連用の形態が可能な点から「ダ」を「ナ」に入れ替えるという例外な場合もあることが検証された(§3.2)。
- (2) コトを表す名詞が後接する場合は、寺村(1992)と戸村(1992)、周・松村(2010)の指摘の再分析を行い、「という」の使用は主節の主体にとって従属節の出来事が2つの別の領域で捉えられるときに現れ、「という」の不使用は主節の主体にとって従属節の出来事が1つの同じ領域として扱われているときに強い傾向を見せていた(§3.3)。
- (3) 発話名詞が後接する場合は、使用するときは「不一致」、「外」、「非現実」といった要因で多く見られ、つまり主節の主体と従属節の出来事の距離が遠い場合に見られた。特に、非現実を表わす後接名詞「噂」、「嘘」のような名詞との結合では「という」の使用は必須である。不使用になるときは主節の主体にとって従属節の出来事が自分や家族のことという主節の主体の領域に入る場合において見られた。また、例外の連体節を取らない形態としては、行動や能力、外見を「いい、悪い」のような評価内容や提案の内容については「といわれる」のような受身表現で用いることが多かった。これは、従属節の出来事について主節の主体が話を聞いている自分に焦点を当てて表現することが日本語でよく使われているためだと考える。すなわち、この場合は動詞構造が好んでいることが分かった(§3.4)。
- (4) 思考名詞が後接する場合も、使用する場合は、主節の主体が「希望、想像・推量」のようなまだ起こっていない出来事に対する気分を表わすものが従属節に位置するときに見られた。不使用の現象では、主節の主体の自身・家族の出来事の気持ちを表示するときに見られた。つまり、主節の主体にとって前者は不確実な出来事に対する思念表現であって、後者は比較的に推測が可能な思念表現であると言える。また、「連体節を取らない」形態は、過去の出来事に対する認識

¹ ここでは以下の3つの要因を適用させ、使用実態を分析した。

- (i) 主節の主体と従属節主体の一致可否
- (ii) 主節の主体にとって従属節の出来事は「情報のなわ張り」の内か外か
- (iii) 主節の主体にとって従属節の出来事は現実か非現実か

変化あるいは現在の状態に対する認識状態において、思考主体の個人的な意見、意向を述べる思考主体の認識を表わしている。この際は、「と思った・思う」のような動詞構造を取るのが名詞を使うよりも好まれていた (§ 3.5)。

- (5) コトを表わす名詞、発話名詞、思考名詞を取り上げ、全体の「という」使用現象を統計的に分析すると、コトを表わす名詞は「不使用」の頻度が高く、発話名詞では「使用」の頻度が、思考名詞では「連体節を取らない」形態の頻度が高く見られ、名詞ごとの違いが明らかに判明された (§ 3.6)。

第 4 章 外の関係に現れる「TANUN」の使用・不使用

韓日対訳小説を用いて名詞種類において「TANUN」の使用・不使用がいかに文法的現象に相関するかという問題について分析を試みた。その結果、次の点が明らかになった。

- (1) 先行研究の指摘を再検討した。まず、寺村(1978, 1992)の言っている従属節の外形的な要素と「TANUN」の使用実態を分析した。従属節の陳述度の度合について、陳述度のレベルの高低に関わらず、「TANUN」の使用頻度が高いことが検証された(日本語と同様に、推量を表わすモダリティ形式、断定を表わす「ダ」の対応表現では、「TANUN」の使用が可能だった)。さらに、韓国語学の研究で従属節の事実性の強・弱の度合について検証を行った結果、事実性の強であると「TANUN」が不使用になりやすく、事実性が弱の構文であると「TANUN」を必ず使用することが確認された。ちなみに、「TANUN」と使用する後接名詞の特徴には、従属節に事実性が弱であれば、後接名詞にも事実確認が不可能な「소문 somwun(噂)」、「의혹 uyhok(疑惑)」といった名詞が用いられ、逆に事実性が強であれば後接名詞にも事実確認ができる「결과 keylkwa(結果)」、「결론 kyellon(結論)」といった名詞と結合しやすいことが、今回の検証を通じて分かった (§ 4.2)。
- (2) コトを表わす名詞が後接する場合は、「TANUN」の使用は主節の主体と従属節の出来事の距離が遠いという 2 つの節が別の領域で捉えられるときに現れ、「TANUN」の不使用は主節の主体と従属節の出来事の距離が近いという 2 つの節が同じ領域として扱われているときに現れることが分かった (§ 4.3)。
- (3) 発話名詞が後接する場合は、主節の主体と従属節の主体が「不一致」の要因と、主節の主体にとって従属節の出来事が「外」に属す要因において「TANUN」の使用が多く見られ、さらに従属節が「噂」や「嘘」のような確認できない非現実の出来事であると「TANUN」が現れていた。不使用においては「一致+内+現実」の要因が満たしていた場合に見られた。また、例外の形態では、話者が直接に会話する例文として命令や提示の内容を話者の言葉で表現するときに、名詞構造より動詞を用いた構造を好んでいた。つまり、発話主体の直接参与する態度と取るときに、動詞構造を用いた表現になりやすい (§ 4.4)。

- (4) 思考名詞が後接する場合は、まず「不一致+外+非現実」という構造において「希望、想像、推量」などの事態における思考内容を表わすときに「다는 생각이 들다 TANUN sayngkak-i tulta(という思いが浮かぶ)」に「TANUN」を使用して表現されていた。また、不使用は「一致+内+非現実」といった構造で自分の行動について思考したものの想念や気持ちを表わすときに見られた。連体節を取らない形態は、思考主体の個人的な意見・意向を表わす認識表現をするときに、過去の事態における認識変化かあるいは現在の状態における認識状態かによって「생각했다 sayngkakhayssta(思った)」、「생각한다 sayngkak-hanta(思う)」のような動詞構造を取ることが好んでいることが分かった (§ 4.5)。
- (5) コトを表わす名詞、発話名詞、思考名詞を取り上げ、全体の「TANUN」使用実態を統計的に分析すると、全般的に「使用」の頻度が高かった。その理由として(i-iii)の要因のうち、一つの要因に妨害されていると「TANUN」は使用してしまいう性質があることが挙げられる (§ 4.6)。

第 5 章 考察

第 5 章では、「という」と「TANUN」の分析から見てきた対照的な面について考察を行った。ここまで検討してきた現象を、池上(2009, 2011)の「主観的把握(subjective construal)」と「客観的把握(objective construal)」と関連づけて考える。

まず、対訳小説コーパスを通して両形式の対応構造を比較すると、「という」と「TANUN」の使用・不使用の出現頻度数は異なることが分かった。「TANUN」から検索した「という」では、不使用(100 個[36.6%])が多く見られ、「TANUN」が使用しているのに対して「という」は不使用になる例が多いことが見られた。この点から、「TANUN」の多くが必ず「という」を使用しているものではないことが分かった。また、「という」から検索した「TANUN」は、使用(使用[原]23 個[7.0%]、使用(対)238 個[73.5%])の頻度が多く見られ、「という」が使用している例に比べ「TANUN」でも使用の例が多いことが分かった。

次に、名詞種類によって両形式の使用実態を比較してみると、「という」においてはコトを表わす名詞が「不使用」で有意に多く現れており、発話名詞と思考名詞では「使用(対)」と「連体節×」で有意に多いことが見られ、各々の名詞種類によって使用状況に差異が現れることが分かった。「TANUN」では、3 つの名詞とも「使用」が多いことが確認され、特に発話名詞と思考名詞よりもコトを表わす名詞において「使用」が多いことが分かった。すなわち、コトを表わす名詞において両形式には「不使用」の例が多く使われていることが確認され、発話名詞と思考名詞において「という」は連体節×が多く、それに比べ「TANUN」には少ないことが分かる。

また、名詞種類と 3 つの要因における使用実態を比較すると、「という」はどの要因にも影響が強いことに比べ、「TANUN」においては使用が多くあるのはコトを表わす名詞では(iii)の現実・非現実によって最も影響されており、発話名詞と思考名詞では(i)一致・不一致の要因の影響力が強いことが分かった。また、全体的な使用実態と 3 つの要因を調べた結果、「という」は 3 つの要因に影響さ

れているが、「TANUN」は(iii)の非現実において多くの例が使用していることが確認できた。

また、発話名詞と思考名詞においては、「という」の構文においては使用・不使用の例よりも「連体節を取らない」形態において出現頻度が多く見られた一方、「TANUN」の構文では使用の例が多いことが見られた。ここでは、前者を「動詞への構造を志向する」、後者を「名詞への構造を志向する」という対照的な構造で現れたのを指摘した。これは、諸研究では文の成分(主語、目的語、修飾語、述語)に分けて調べ得た成果として、「日本語は名詞志向構造、韓国語は動詞志向構造」と主張してき議論と逆性向に現れた点で興味深い。あえて、本研究では修飾語の中での発話・思考内容を表す表現では、韓国語が名詞構造を好み、日本語が動詞構造を好むという対立構造が可能だと推察される。補足すると、発話内容を表わす表現においては、日本語で「と」を用いた受身で現れる動詞構造は、主節の主体が事態に直接参加した態度で接近し、主節の主体が従属節に直接参与したスタンスである「主観的な把握」として表現しやすい。逆に、韓国語で発話内容を表わす表現において「TANUN」を用いた名詞構造は、主体はある事態と間をとる間接参与したスタンスで接し、「客観的に把握」しようとする表現が出やすいと言える。

第6章 結論

以上、本研究では「という」と「TANUN」の使用・不使用の実態を対照することによって、両言語には少なくともこの3種類の名詞に限って、後接名詞のみならず、主節の主体と従属節の出来事との相関関係を分析することによって、以下のような点が明らかになった。

[1] 「というの使用実態については次のような現象が明らかになった。

- ① コトを表わす名詞においては、寺村(1992)の研究でコトを表わす名詞では「任意」の使用状況について指摘されていたが、本研究を通して多くの「という」の例が不使用になる場合が検証できた。
- ② 発話名詞と思考名詞において、寺村で必須と任意であると指摘したことに検証され、さらに、この2つの名詞においては連体節を取らない形態が多いことも新たに確認できた。これは、発話名詞が連体節を取らない場合は、主節の主体が自分のことについて聞いた内容を表わすときに見られ、思考名詞では思考主体の個人的な意見、意向を述べる際に見られた。

[2] 「TANUN」の使用実態については、以下のような現象が分かった。

- ① 「TANUN」においては、名詞種類における使用実態の分析は現在までなされていなかったが、本研究を通して3つの名詞のうち、コトを表わす名詞において「使用」が多いことが確認できた。
- ② 名詞種類と3つの要因における両形式の使用実態を比較すると、「という」はどの要因にも影響が強いことに比べ、「TANUN」はコトを表わす名詞では(iii)の現実・非現実によって最

も影響されており、発話名詞と思考名詞では(i)一致・不一致の要因の影響力が強いことが確認された。

- ③ 全体的な「TANUN」の使用実態を調べた結果、「使用」の状況が多く見られ、特に(iii)の非現実の要因という従属節の出来事が主節の主体にとって不確実に認識している場合において最も影響が強いことが分かった。

[3] 両形式の発話名詞と思考名詞においては次のような相異が見られた。

- ① 発話内容を表わす文においては、動作主(話の中の主体)に視点を置いて表現するよりも、話を聞いた主体に「視点」を置き表現しようとするため、受身表現が多い日本語では動詞構造への好みが見られ、韓国語にはその影響が少ないため名詞構造に表現されていた。
- ② 思考内容を表わす文においては、主節の主体が認識した出来事について個人的な意見や意向を表示するときに、日本語では「と思う」のように動詞構造が典型的に使われる一方、韓国語では名詞構造で使われていることが好まれていた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近似の文法体系を有する日本語と韓国語において、共通して連体節と後続名詞を繋ぐ形式である「という」と「다는(TANUN)」を対象に、コーパスを用いたテキスト分析の観点からそれぞれの言語におけるその形式の用法、特にその使用・不使用の原理を明らかにし、さらに対訳における対応表現と対照することによって、両言語間で近似の機能を持つ表現間の異同を総合的・実証的に解明したものである。

日本語の「という」の先行研究は多く、韓国語の「다는(TANUN)」のそれはまだ限られているが、いずれも連体節と後続名詞を繋ぐ役割におけるその形式使用の必須・任意・不可の要因の分析において、先行研究ではデータを母語話者の内省判断のみに頼るものが殆どである。本論文は、そういった先行研究の論点を、両言語の小説における使用実態をもとに統計を用いた客観的な手法により検証している。また、日本語「という」の先行研究での分析視点(後続名詞の種類、等)を初めて韓国語「다는(TANUN)」の使用実態の体系的な分析に援用し、よってこれまで殆ど皆無であった当該の形式の韓日語間の対照研究を成し遂げている。そこに本研究の特色・意義があり、多くの新知見を得ている。

具体的には、日本語でこれまでの先行研究では「という」が必須とされた発話名詞の場合にも不使用の例が見られそれが連体節の表す内容と主節の主体との関係等の要因が関わっていることや、韓国語についても、「다는(TANUN)」の使用・不使用を決める要因が連体節の表す内容の事実性だけでなく後続名詞の種類にもあること等を新規に指摘することに成功している。また、両言語の対照においては、コト名詞との共起が最も多いという共通点を指摘する一方、発話と思考の表現に関しては韓国

語の名詞表現が日本語の動詞表現に多く対応するという、韓日語対照研究では定説となっている両語間の対応関係とは逆のパターンがこれら従属節表現の間に存在することを発見し、使用される受動表現や思考表現の性格からそのことが認知言語学における視点や主観的把握の傾向の違いによって説明できることを論じている。

指摘された要因間の関連性に関するさらに深い観点の考察など今後の課題として残る点もなしとしない。しかし、韓日語両言語の豊富なデータに見られる全用例を対象として統計を用いて検証した点、さらに主観性に関する認知言語学的考察を行った点など、高く評価される。上に示した本論文の新規性を併せて考えて、その成果は、執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示すものである。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。